



阪神電気鉄道120周年

第2回

(4回続きシリーズ)

阪神電鉄が1905年4月12日、神戸（三宮）―大阪（出入橋）間の鉄道営業を開始して以来、今年で開業120周年を迎える。尼崎市と西宮市は歴史的なつながりが深く、現在のまちづくりに欠かさない存在だ。松本真市長と石井登志郎市長、尼崎市出身のレーシングドライバー小林可夢偉さんに、阪神電鉄との関わりや思いについて話を聞いた。

開業以来の縁 なお深く



現在の甲子園駅の場所に架かっていた枝川鉄橋を走る旧1形電車

西宮市 石井 登志郎 市長



阪神電鉄と西宮市の関わりは、1905年、阪神電鉄が大阪―神戸間を線路で結んだことで、西宮にさまざまなインパクトがあった。当時、村落の中心部を結んだ曲がりくねった線路を通じたことで、沿線住民の足としての役割を担う意思が感じられる。電車を走らせるため発電所も整備したことにより、沿線地域の電力供給源としての機能も果たした。また、周辺の土地を活用して24年に甲子園球場、29年に甲子園球場（後の甲子園阪神パーク）などを整備し、にぎわいづくりや人口増にも貢献した。

西宮市は25年、関西では12番目に市制が施行された。それまでの11市は県庁所在地か、かつての城下町か商都。いわばお上りによって栄えたまちであったのに対し、西宮は酒蔵や電鉄会社など「民」の市であり、阪神電鉄はその立役者でもある。



戦後、甲子園球場の東に再建された甲子園阪神パーク。動物園ではソウやキリン、サルが人気者だった。1995年3年ぶりの阪神甲子園球場

その後も阪神電鉄との関わりは深くなった。阪神・淡路大震災で西宮市も阪神電鉄も甚大な被害を受け、しばらくは復旧で手いっぱいだった。2020年から20歳のついで（旧成人式）の会場として甲子園球場を使わせていただくことにな

「民」のまち繁栄の立役者

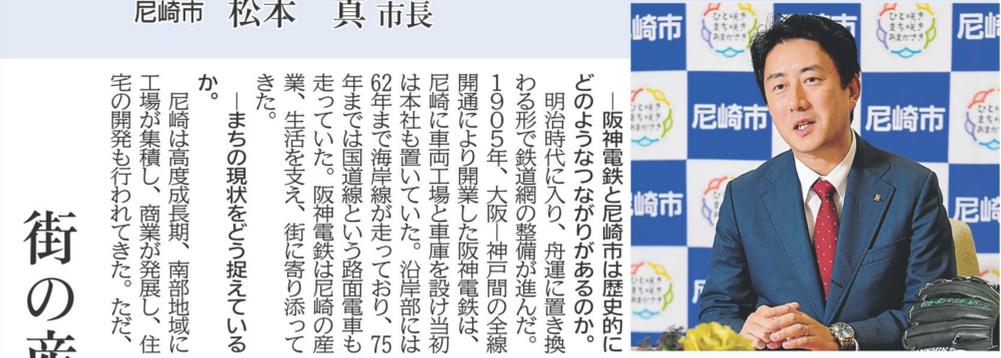
阪神電鉄が以前にも増して地域との関わりを大切にしようとする姿勢を感じるようになった。この10年で、市や阪神電鉄のさまざまなプロジェクトが動き始めた。その一つが、鳴尾駅（現鳴尾・武庫川女子大前駅）付近の鉄道高架化で、高架下空間に武庫川女子大学の施設が入った。甲子園駅近くでは、甲子園球場までに商業施設や円形広場、タイガースロードが新たにでき、スポーツを核とした地域活性化の取り組みも始まった。現在は西宮駅北地区で、公民連携事業が進んでいる。40階前

後の住宅棟や図書棟、バスロータリーなどが整備され、31年12月に完成する予定だ。

阪神タイガースへの期待は、今年が球団創設から90年。チームとしての活躍ももちろんだが、西宮出身の佐藤輝明選手と下村海翔選手の活躍に期待したい。

西宮市の良いところは、今年市制100周年を迎える。その記念冊子に登場していただきたい阪神タイガース前監督の岡田彰布さんが、西宮市を「ちよとよい街」と表現していた。そしてこ都会でありながら、海も山もゴルフ場にもすぐ行くことができる。そして大阪へは20分。これからは阪神電鉄と沿線価値の向上のため、二人三脚で歩んでいきたい。

尼崎市 松本 真市長



阪神電鉄と尼崎市は歴史的にどのようなつながりがあるのか。明治時代に入り、舟運に置き換わる形で鉄道網の整備が進んだ。1905年、大阪―神戸間の全線開通により開業した阪神電鉄は、尼崎に車両工場と車庫を設け当初は本社も置いていた。沿岸部には62年まで海岸線が走っており、75年までは国道線という路面電車も走っていた。阪神電鉄は尼崎の産業、生活を支え、街に寄り添ってきた。

街の産業と生活の基盤に

尼崎は高度成長期、南部地域に工場が集中し、商業が発展し、住宅の開発も行われてきた。ただ、



竣工（しゅんこう）当時の尼崎旧本社

重要性増す交通の結節点

阪神電鉄と尼崎市は歴史的にどのようなつながりがあるのか。明治時代に入り、舟運に置き換わる形で鉄道網の整備が進んだ。1905年、大阪―神戸間の全線開通により開業した阪神電鉄は、尼崎に車両工場と車庫を設け当初は本社も置いていた。沿岸部には62年まで海岸線が走っており、75年までは国道線という路面電車も走っていた。阪神電鉄は尼崎の産業、生活を支え、街に寄り添ってきた。



大正初期の尼崎駅

芝生広場を設け、ベンチやテーブルなど、ゆつくりしていただけの環境を整えるほか、飲食店を誘致するなど若い世代も楽しめるようにした。観光資源の要である尼崎城の運営についても阪神グループにお願いしている。

阪神タイガースへの期待を。藤川球児監督の下、今シーズンも好成績を期待している。また、2軍球場から1人でも多く、1車で活躍する選手が巣立っていくよう応援したい。



小林可夢偉さんの写真は、TOYOTA提供

鈴鹿方面へ臨時運行に驚き



小林可夢偉選手への応援を広げるため、阪神電車の沿線に掲げられた応援旗―尼崎市西御園町

阪神電車の印象は、阪神電車の沿線に育ったので生活の一部だった。阪神パークにもよく遊びに行った。2021ルマン24時間総合優勝を果たした



僕が育った尼崎は超下町で、たまに帰った時でも、昔から知っている人たちが今も仲良く話せてもらっている。100円で食べられるたこ焼きやホルモン焼きが今も残っており、久しぶりに帰った時も食べたと思うほど。モータースポーツというとセレブな世界を思い浮かべる人が多いと思うが、僕のような下町で育った人間がレーシングドライバーになれたことは不思議な感じがしている。

これから目標は、レースを続けていて感じるの、レースのことだけでなく、レース以外のことを多く学ばせてもらったということだ。モータースポーツを通じて、だれかのために貢献する、役立つ世界をもっと作ってきたいし、そのためのアクションを起こし、明るい日本の未来をつくってきたい。

幼い頃を過ごした尼崎の思い出は、鈴鹿F1グランプリで、阪神電車が尼崎からお客様さんを連れてくるためにサーキットの最寄りの駅まで直通の臨時列車を運行してくれたことだ。尼崎から鈴鹿の方まで線路が繋がっているというところが、まだ信じられないくらいだ。

僕らが住んでいた頃と比べると、尼崎はすごく住みやすくなった。大阪からのアクセスもすごく良く、皆さんにとって住みたいまちと言っているだけのことでもうれしく、誇りに感じる。新しい建物はずっと建てられているが、その中に人間味あふれる下町を感じられる場所も残っている。そういう場所に足を運んで、尼崎らしさを感じてほしい。

2024年9月、F1世界耐久選手権富士6時間レースでの小林可夢偉さん

阪神電鉄ダイアリー Hanshin



1959年2月23日 開業53年目



1972年10月5日、阪神電鉄で最初の自動改札機が尼崎駅に設置された